

老妓抄

岡本かの子

青空文庫

平出園子というのが老妓ろうぎの本名だが、これは歌舞伎俳優の戸籍名のように当人の感じにならずまいところがある。そうかといって職業上の名の小そのとだけでは、だんだん素しろう人の素朴な気持ちに還ろうかえとしている今日の彼女の氣品にそぐわない。

ここではただ何となく老妓といつて置く方がよからうと思う。

人々は真昼の百貨店でよく彼女を見かける。

目立たない洋髪に結び、市樂いちらくの着物を堅氣風かたぎにつけ、小女一人連れて、憂鬱な顔をして店内を歩き廻る。恰幅かつぶくのよい長身に両手をだらりと垂らし、投出して行くような足取りで、一つとところを何度も廻り返す。そうかと思うと、紙風たこの糸のようにすつとのおして行つて、思いがけないような遠い売場に佇むたたず。彼女は真昼の寂しき以外、何も意識していない。

こうやつて自分を真昼の寂しさに懣いこわしている、そのことさえも意識していない。ひよつと目星めほしい品が視野から彼女を呼び覚すと、彼女の青みがかつた横長の眼がゆつたりと開いて、対象の品物を夢のなかの牡丹ぼたんのように眺める。唇が娘時代のように捲まくれ氣味に、片隅へ寄ると其処そこに微笑うかが泛ぶ。また憂鬱に返る。

だが、彼女は職業の場所に出て、好敵手が見つかる、はじめはちよつと呆けたような表情をしたあとから、いくらでも快活に喋舌り出す。

新喜楽のまえの女将おかみの生きていた時分に、この女将と彼女と、もう一人新橋のひさごあたりが一つ席に落合つて、雑談でも始めると、この社会人の耳には典型的と思われる、機智と飛躍に富んだ会話が展開された。相当な年配の芸妓たちまで「話し振りを習おう」といつて、客を捨てて老女たちの周囲に集つた。

彼女一人のときでも、氣に入つた若い同業の女のためには、経歴談をよく話した。

何も知らない雛妓おしやく時代に、座敷の客と先輩との間に交される露骨な話に笑い過ぎて畳の上に粗相そそうをして仕舞い、座が立てなくなつて泣き出してしまったことから始めて、囲いの時代に、情人と逃げ出して、旦那におふくろを人質にとられた話や、もはや抱妓かかえっこの二人三人も置くような看板ぬしになつてからも、内実の苦しみは、五円の現金を借りるために、横浜往復十二円の月末払いの俵くるまに乗つて行つたことや、彼女は相手の若い妓たちを笑いでへとへとに疲らせずには措おかないまで、話の筋は同じでも、趣向は変えて、その迫り方は彼女に物の怪けがつき、われ知らずに魅惑の爪を相手の女に突き立てて行くように見える。若さを嫉妬しつとして、老いが狡猾こうかつな方法で巧みに責め苛さいなんでいるようにさえ見える。

若い芸妓たちは、とうとう髪を振り乱して、両脇腹を押え喘いでいうのだった。

「姐さん、頼むからもう止してよ。この上笑わせられたら死んでしまう」

老妓は、生きてる人のことは決して語らないが、故人で馴染のあつた人については一皮剥いた彼女独特の観察を語った。それ等の人の中には思いがけない素人や芸人もあつた。支那の名優の梅蘭芳メイランファンが帝国劇場に出演しに來たとき、その肝煎りきもいをした某富豪に向つて、老妓は「費用はいくらかかつても関いませんから、一度のおりをつくつて欲しい」と頼み込んで、その富豪に宥め返されたという話が、嘘か本当か、彼女の逸話の一つになつてゐる。

笑ひ苦しめられた芸妓の一人が、その復讐のつもりもあつて

「姐さんは、そのとき、銀行の通帳を帶揚げから出して、お金ならこれだけありますと、その方に見せたというが、ほんとうですか」と訊く。

すると、彼女は

「ばかばかしい。子供じゃあるまいし、帶揚げのなんのつて……」

こどものようになつて、ぶんぶん怒るのである。その真偽しんぎはとにかく、彼女からこういううぶな態度を見たいためにも、若い女たちはしばしば訊いた。

「だがね。おまえさんたち」と小そのは総てを語ったのちにいう、「何人男を代えてもつづまるところ、たった一人の男を求めているに過ぎないのだね。いまこうやって思い出して見て、この男、あの男と部分々に牽かれるものの残っているところは、その求めている男の一部々々の切れはしなのだよ。だから、どれもこれも一人では永くは続かなかったのさ」

「そして、その求めている男というのは」と若い芸妓たちは訊き返すと

「それがはつきり判れば、苦労なんかしやしないやね」それは初恋の男のようでもあり、また、この先、見つかつて来る男かも知れないのだと、彼女は日常生活の場合の憂鬱な美しさを生地きじで出して云った。

「そこへ行くと、堅気さんの女は羨うらやましいねえ。親がきめて呉れる、生涯ひとりの男を持つて、何も迷わずに子供を儲もつけて、その子供の世話になって死んで行く」

ここまで聴くと、若い芸妓たちは、姐さんの話もいいがあとが人をくさらしていけないと評するのであった。

小そのが永年の辛苦しんくで一通りの財産も出来、座敷の勤めも自由な選択が許されるように

なつた十年ほど前から、何となく健康で常識的な生活を望むようになった。芸者屋をしている表店と彼女の住っている裏の蔵附の座敷とは隔離してしまつて、しもたや風の出入口を別に露地から表通りへつけるように造作したのも、その現れの一つであるし、遠縁の子供を貰^{もら}つて、養女にして女学校へ通わせたのもその現れの一つである。彼女の稽古事が新時代的のものや知識的のものに移つて行つたのも、或^{ある}はまたその現れの一つと云えるかも知れない。この物語を書き記す作者のもとへは、下町のある知人の紹介で和歌を学びに來たのであるが、そのとき彼女はこういう意味のことを云つた。

芸者というものは、調法ナイフのようなもので、これと云つて特別によく利くこともいらないが、大概なことに間に合うものだけは持つていなければならない。どうかその程度に教えて頂き度^たい。この頃は自分の年恰好から、自然上品向きのお客さんのお相手をする事が多くなつたから。

作者は一年ほどこの母ほども年上の老女の技能を試みたが、和歌は無い素質ではなかつたが、むしろ俳句に適する性格を持つてるのが判つたので、やがて女流俳人の××女に紹介した。老妓はそれまでの指導の礼だといって、出入りの職人を作者の家へ寄越して、中庭に下町風の小さな池と噴水を作つて呉れた。

彼女が自分の母屋を和洋折衷風に改築して、電化装置にしたのは、彼女が職業先の料亭のそれを見て来て、負けず嫌いからの思い立ちに違いないが、設備して見て、彼女はこの文明の利器が現す働きには、健康的で神秘的なものを感じるのだった。

水を口から注ぎ込むとたちまち湯になつて栓口から出るギザーや、煙管の先で圧すと、すぐ種火が点じて煙草に燃えつく電気苧盆や、それらを使いながら、彼女の心は新鮮に慄えるのだった。

「まるで生きものだね、ふーむ、物事は万事こういかなくっちゃ……」

その感じから想像に生れて来る、端的で速力的な世界は、彼女に自分のして来た生涯を顧みさせた。

「あたしたちのして来たことは、まるで行燈をつけては消し、消してはつけるようなまどろい生涯だった」

彼女はメートルの費用の嵩むのに少からず辟易しながら、電化装置をいじるのを楽しみに、しばらくは毎朝こどものように早起した。

電気の仕掛けはよく損じた。近所の蒔田という電気器具商の主人が来て修繕した。彼女はその修繕するところに附纏つて、珍らしそうに見ているうちに、彼女にいくらかの電

気の知識が撮り入れられた。

「陰の電気と陽の電気が合体すると、そこにいろいろの働きを起して来る。ふーむ、こりや人間の相性とそつくりだねえ」

彼女の文化に対する驚異は一層深くなった。

女だけの家では男手の欲しい出来事がしばしばあった。それで、この方面の支弁も兼ねて蒔田が出入りしていたが、あるとき、蒔田は一人の青年を伴つて来て、これから電気の方のことはこの男にやらせると云つた。名前は柚木ゆきといった。快活で事もなげな青年で、家の中を見廻しながら

「芸者屋にしちやあ、三味線がないなあ」などと云つた。度々たびたび来ているうち、その事もなげな様子と、それから人の氣先きさきを撥ね返す颯爽さつそうとした若い気分が、いつの間にか老妓の手頃な言葉仇がたきとなつた。

「柚木君の仕事はチャチだね。一週間と保つた試しはないぜ」彼女はこんな言葉を使うようになった。

「そりやそうさ、こんなつまらない仕事は、パッションが起らないからねえ」
「パッションで何だい」

「パッションかい、ははは、そうさなあ、君たちの社会の言葉でいうなら、うん、そうだ、
いろ気が起らないということだ」

ふと、老妓に自分の生涯に憐みの心が起った。パッションとやらが起らずに、ほとんど
生涯勤めて来た座敷の数々、相手の数々が思い^{うか}泛べられた。

「ふむ、そうかい。じゃ、君、どういう仕事ならいろ気が起るんだい」

青年は発明をして、専売特許を取って、金を儲けることだといった。

「なら、早くそれをやればいいじゃないか」

柚木は老妓の顔を見上げたが

「やればいいじゃないかって、そう事が簡単に……（柚木はここで舌打をした）だから君
たちは遊び女^めといわれるんだ」

「いやそうでないね。こう云い出したからには、こっちに相談に乗ろうという腹があるか
らだよ。食べる方は引受けるから、君、思う存分にやってみちやどうだね」

こうして、柚木は蒔田の店から、小そのが持っている家作の一つに移った。老妓は柚木
のいうままに家の一部を工房に仕替え、多少の研究の機械類も買ってやった。

小さい時から苦学をしてやつと電気学校を卒業はしたが、目的のある柚木は、体を縛られる勤人になるのは避けて、ほとんど日傭取り同様の臨時雇いになり、市中の電気器具店廻りをしていたが、ふと蒔田が同郷の中学の先輩で、その上世話好きの男なのに糾^{ほど}され、しばらくその店務を手伝うことになって住み込んだ。だが蒔田の家には子供が多いし、こまこました仕事は次から次とあるし、辟易していた矢先だったのですぐに老妓の後援を受け入れた。しかし、彼はたいして有難いとは思わなかった。散々あぶく銭を男たちから絞って、好き放題なことをした商売女が、年若い良心への償いのため、誰でもこんなことはしたいのだろう。こつちから恩恵を施してやるのだという太々しい考^{かんがえ}は持たないまでも老妓の好意を負担には感じられなかった。生れて始めて、日々の糧の心配なく、専心^{なめ}に書物の中のことで、実験室の成績と突き合せながら、使える部分を自分の工夫の中へ糅^{なめ}し取って、世の中にないものを創り出して行こうとする静かで足取りの確かな生活は幸福だった。柚木は自分ながら壮軀^{よく}と思われる身体に、麻布のブルーズを着て、頭を顰^{こて}で縮らし、椅子に斜^よに倚^よって、煙草を燻^くゆらしている自分の姿を、柱かけの鏡の中に見て、前とは別人のように思い、また若き発明家に相応^{ふさ}わしいものに自分ながら思った。工房の外は廻り縁^{くけい}になっていて、矩形の細長い庭には植木も少しはあった。彼は仕事に疲れると、この縁

へ出て仰向けに寝転び、都会の少し淀んだ青空を眺めながら、いろいろの空想をまどろみの夢に移し入れた。

小そのは四五日目毎に見舞つて来た。ずらりと家の中を見廻して、暮しに不自由そんな部分を憶えて置いて、あとで自宅のものの誰かに運ばせた。

「あんたは若い人にしちや世話のかからない人だね。いつも家の中はきちんとしているし、よごれ物一つ溜めてないね」

「そりやそうさ。母親が早く亡くなつちやつたから、あかんぼのうちから襦袢おむつを自分で洗濯して、自分で当てがつた」

老妓は「まさか」と笑つたが、悲しい顔付きになつて、こう云つた。

「でも、男があんまり細かいことに気のつくのは偉くなれない性分じやないのかい」

「僕だつて、根からこんな性分でもなさ相だが、自然と慣らされてしまったのだね。ちつとでも自分にだらしがないところが眼につくと、自分で不安なのだ」

「何だか知らないが、欲しいものがあつたら、遠慮なくいくらでもそうお云いよ」

初はつ午うまの日には稲荷いなり鮎あずしなど取寄せて、母子のような寛くつろぎ方で食べたりした。

養女のみち子の方は気紛れであつた。来はじめると毎日のように来て、柚木を遊び相手

にしようとした。小さい時分から情事を商品のように取扱いつけているこの社会に育って、いくら養母が遮断したつもりでも、商品的の情事が心情に染みないわけはなかった。早くからマセて仕舞つて、しかも、それを形式だけに覚えて仕舞つた。青春などは素通りして仕舞つて、心はこどものまま固つて、その上皮にほんのひとえ一重大人の分別がついてしまった。柚木は遊び事には気が乗らなかつた。興味が弾はまないままみち子は来るのが途絶とだえて、久しくしてからまたのつそりと来る。自分の家で世話をしている人間に若い男が一人いる、遊びに行かなくちや損だというくらいの気持ちだった。老母が縁もゆかりもない人間を拾つて来て、不服らしいところもあつた。

みち子は柚木の膝の上へ無造作に腰をかけた。様式だけは完全な流なが晒しめをして

「どのくらい目方があるか量はかつてみてよ」

柚木は二三度膝を上げ下げしたが

「結婚適齢期にしちやあ、情操のカンカンが足りないね」

「そんなことはなくつてよ。学校で操行点はAだったわよ」

みち子は柚木という情操という言葉の意味をわざと違えて取ったのか、本当に取り違えたものか――

柚木は衣服の上から娘の体格を探って行つた。それは栄養不良の子供が一人前の女の嬌態をする正体を発見したような、おかしみがあつたので、彼はつい失笑した。

「ずいぶん失礼ね」

「どうせあなたは偉いのよ」みち子は怒つて立上つた。

「まあ、せいぜい運動でもして、おつかさん位な体格になるんだね」

みち子はそれ以後何故とも知らず、しきりに柚木に憎みを持つた。

半年ほどの間、柚木の幸福感は続いた、しかし、それから先、彼は何となくぼんやりして来た。目的の発明が空想されているうちは、確に素晴らしく思つたが、実地に調べたり、研究する段になると、自分と同種の考案はすでにくつも特許されていてたとえ自分の工夫の方がずっと進んでいるにしても、既許のものとの^{ていしよく}牴触を避けるため、かなり模様を変えねばならなくなつた。その上こういう発明器が果して社会に需要されるものやらどうかも疑われて来た。実際専門家から見ればいいものなのだが、一向社会に行われない結構な発明があるかと思えば、ちよつとした思付きのもので、非常に当ることもある。発明にはスペキュレーションを伴うということも、柚木は兼ね兼ね承知していることではあつ

たが、その運びがこれほど思いどおり素直に行かないものだとは、実際にやり出してはじめて痛感するのだった。

しかし、それよりも柚木にこの生活への熱意を失わしめた原因は、自分自身の気持ちに在った。前に人に使われて働いていた時分は、生活の心配を離れて、専心に工夫に没頭したら、さぞ快いだろうという、その憧憬から日々の雑役も忍べていたのだが、その通りに朝夕を送れることになってみると、単調で苦澁なものだった。ときどきあまり静で、その上全く誰にも相談せず、自分一人だけの考を突き進めている状態は、何だか見当違いなことをしているため、とんでもない方向へ外れていて、社会から自分一人が取り残されたのではないかという脅えさえ屢々^{しばしば}起った。

金儲けということについても疑問が起った。この頃のように暮しに心配がなくなりほんの気晴らしに外へ出るにしても、映画を見て、酒場へ寄って、微酔を帯びて、円タクに乗って帰るぐらいのことで充分すむ。その上その位な費用なら、そう云えば老妓は快く呉れた。そしてそれだけで自分の慰楽は充分満足だった。柚木は二三度職業仲間^{きま}に誘われて、女道楽をしたこともあるが、売もの、買ひもの以上に求める気は起らず、それより、早く気儘^{きま}の出来る自分の家へ帰って、のびのびと自分の好みの床に寝たい気がしきりに起った。

彼は遊びに行つても外泊は一度もしなかった。彼は寝具だけは身分不相応のものを作つていて、羽根蒲団ぶとんなど、自分で鳥屋から羽根を買つて来て器用こしらに拵こしらえていた。

いくら探してみてもこれ以上の慾が自分に起りそうもない、妙に中和されて仕舞つた自分を発見して柚木は心寒くなつた。

これは、自分等の年頃の青年にしては変態になつたのではないかしらんと考えた。それに引きかえ、あの老妓は何という女だろう。憂鬱な顔をしながら、根に判らない逞ましいものがあつて、稽古ごと一つだつて、次から次へと、未知のものを貪むさぼり食つて行くとしてゐる。常に満足と不満が交る交る彼女を押し進めている。

小そのがまた見廻りに来たときに、柚木はこんなことから訊く話を持ち出した。

「フランスレビューの大立物の女優で、ミスタンゲットというのがあがね」

「ああそんなら知ってるよ。レコードで……あの節廻しはたいしたもんだね」

「あのお婆さんは体中の皺を足の裏へ、括くくつて溜ためめているという評判だが、あんたなんかまだその必要はなさそうだなあ」

老妓の眼はぎろりと光つたが、すぐ微笑して

「あたしかい、さあ、もうだいぶ年越の豆の数も殖えたから、前のようにには行くまいが、

まあ試しに」といって、老妓は左の腕の袖口を捲まくつて柚木の前に突き出した。

「あんたがだね。ここの腕の皮を親指と人差指で力一ぱい抓つかつて圧おさえててご覧」

柚木はいう通りにしてみた。柚木にそうさせて置いてから、老妓はその反対側の腕の皮膚を自分の右の二本の指で抓つかつて引くと、柚木の指に挟はさまっていた皮膚はじいわり滑り抜けて、もとの腕の形に納まるのである。もう一度柚木は力を籠めて試してみたが、老妓にひかれると滑り去つて抓り止めていられなかった。鰻うなぎの腹のような韌つよい滑なめかさと、羊皮紙のような神秘的な白い色とが、柚木の感覚にいつまでも残った。

「気持ちの悪い……。だが、驚いたなあ」

老妓は腕に指痕の血の気がさしたのを、縮ちりめん緬じゆばんの襦じゆばん袢はんの袖で擦り散らしてから、腕を納めていった。

「小さいときから、打つたり叩たたかれたりして踊りで鍛えられたお蔭だよ」

だが、彼女はその幼年時代の苦勞を思い起して、暗澹あんたんとした顔つきになった。

「おまえさんは、この頃、どうかおしかえ」

と老妓はしばらく柚木をじろじろ見ながらいった。

「いいえさ、勉強しろとか、早く成功しろとか、そんなことをいうんじゃないよ。まあ、

魚にしたら、いきが悪くなったように思えるんだが、どうかね。自分のことだけだつて考
え^{あま}剩っている筈の若い年頃の男が、年寄の女に向つて年齢のことを氣遣うのなども、もう
皮肉に氣持ちがこずんで來た証拠だね」

柚木は洞察の鋭さに舌を巻きながら、正直に白状した。

「駄目だな、僕は、何も世の中にいる氣がなくなつたよ。いや、ひよつとしたら始めから
ない生れつきだつたかも知れない」

「そんなこともなからうが、しかし、もしそうだったら困つたものだね。君は見違えるほ
ど体など肥つて來たようだがね」

事実、柚木はもとよりいい体格の青年が、ふーと膨れるように脂肪がついて、坊ちゃん
らしくなり、茶色の瞳の眼の上^{うわまぶた}、^は瞼の腫れ具合や、顎が二重に括^{くく}れて來たところに艶め
いたいろさえつけていた。

「うん、体はともいい状態で、ただこうやつていだけで、とろとろしたい氣持ちで、
よつぽど氣を張り詰めていないと、氣にかけなくちやならないことも直ぐ忘れてい
るんだ。それだけ、また、ふだん、いつも不安なのだよ。生れてこんなこと始めてだ」

「麦とろの食べ過ぎかね」老妓は柚木がよく近所の麦飯ととろろを看板にしている店から、

それを取寄せて食べるのを知っているものだから、こうまぜつかえしたが、すぐ真面目になり「そんなときは、何でもいいから苦勞の種を見付けるんだね。苦勞もほどの分量にや持ち合せているもんだよ」

それから二三日経って、老妓は柚木を外出に誘った。連れにはみち子と老妓の家の抱えでない柚木の見知らぬ若い芸妓が二人いた。若い芸妓たちは、ちよつとした盛装をしていて、老妓に

「姐さん、今日はありがとう」と丁寧^{ていねい}に礼を云った。

老妓は柚木に

「今日は君の退屈の慰勞会をするつもりで、これ等の芸妓たちにも、ちゃんと遠出の費用を払つてあるのだ」と云った。「だから、君は旦那になったつもりで、遠慮なく愉快をすればいい」

なるほど、二人の若い芸妓たちは、よく働いた。竹屋の渡しを渡船に乗るときには年下の方が柚木に「おにいさん、ちよつと手を取つて下さいな」と云った。そして船の中へ移るとき、わざとよろけて柚木の背を抱えるようにして掴^{つか}まった。柚木の鼻に香油の匂いがし

て、胸の前に後襟の赤い裏から肥った白い首がむっくり抜き出て、ぼんの窪くぼの髪の毛の生え際が、青く霞めるところまで、突きつけたように見せた。顔は少し横向きになっていたのも、厚く白粉おしろいをつけて、白いエナメルほど照りを持つ頬から中高の鼻が彫刻のようにはっきり見えた。

老妓は船の中の仕切りに腰かけていて、帯の間から煙草入れとライターを取出しかけながら

「いい景色だね」と云った。

円タクに乗ったり、歩いたりして、一行は荒川放水路の水に近い初夏の景色を見て廻った。工場が殖え、会社の社宅が建ち並んだが、むかしの鐘ヶ淵や、綾瀬の面かげは石炭殻の地面の間に、ほんの切れ端になってところどころに残っていた。綾瀬川の名物の合歡ねむの木は少しばかり残り、対岸の蘆洲あしすの上に船大工だけ今もいた。

「あたしが向島の寮に囲われていた時分、旦那がとても嫉妬家やきもちやきでね、この界限かいわいから外へは決して出して呉れない。それであたしはこの辺を散歩すると云って寮を出るし、男はまた鯉釣りに化けて、この土手下の合歡の並木の陰に船を繋もやつて、そこでいまいうランデヴウをしたものさね」

夕方になって合歡の花がつぼみかかり、船大工の槌つちの音がいつの間にか消えると、青白い河かわ霽もやがうつすり漂う。

「私たちは一度心中の相談をしたことがあったのさ。なにしろ舩ふなべり一つ跨またげば事が済むことなのだから、ちよつと危かつた」

「どうしてそれを思い止つたのか」と柚木は、思い詰めた若い男女を想像しながら訊いた。「いつ死のうかと逢う度毎に相談しながら、のびのびになつていゝうちに、ある日川の向うに心中態ていの土左衛門が流れて来たのだよ。人だかりの間から熟々つくづく眺めて来て男は云つたのさ。心中つてもものも、あれはざまの悪いものだ、やめようつて」

「あたしは死んで仕舞つたら、この男にはよかろうが、あとに残る旦那が可哀想だという気がして来てね。どんな身の毛のよだつような男にしろ、嫉妬やきもちをあれほど妬やかれるとあとに心が残るものさ」

若い芸妓たちは「姐さんの時代ののんきな話を聴いていると、私たちきょう日の働き方が熟々がつがつにおもえて、いやんなっちゃう」と云つた。

すると老妓は「いや、そうでないねえ」と手を振つた。「この頃はこの頃でいいところがあるよ。それにこの頃は何でも話が手取り早くて、まるで電気のようにでさ、そしていろ

いろの手があつて面白いじゃないか」

そういう言葉に執成とりなされたあとで、年下の芸妓を主に年上の芸妓が介添かいぞえになって、頻しきりに艶めなまかしく柚木を取持った。

みち子はというと何か非常に動揺させられているように見えた。

はじめは軽蔑した超然とした態度で、一人離れて、携帯のライカで景色など撮うつしていたが、にわかには柚木に慣れ慣れしくして、柚木の歓心を得ることにかけて、芸妓たちに勝越そうとする態度を露骨に見せたりした。

そういう場合、未成熟なまの娘の心身から、利かん気を僅かに絞り出す、病やみどり鶏どりのささ身ほどの肉感的な匂いが、柚木には妙に感覚にこたえて、思わず肺の底へ息を吸わした。だが、それは利那せつな的のものだった。心に打ち込むものはなかった。

若い芸妓たちは、娘の挑戦を快くは思わなかったらしいが、大姐さんの養女のことではあり、自分達は職業的に来ているのだから、無理な骨折りを避けて、娘が努めるうちは媚こびを差控え、娘の手が緩ゆるむと、またサーヴィスする。みち子にはそれが自分の菓子の上にかかる蠅はのようにうるさかった。

何となくその不満の気持ちを晴らすらしく、みち子は老妓に当たったりした。

老妓はすべてを大して氣にかけず、悠々と土手でカナリヤの餌のはこべを摘んだり菖蒲園できぬかつぎを着にビールを飲んだりした。

夕暮になつて、一行が水神の八百松へ晚餐をとりに入ろうとすると、みち子は、柚木をじろりと眺めて

「あたし、和食のごはんたくさん、一人で家に帰る」と云い出した。芸妓たちが驚いて、では送ろうというと、老妓は笑つて

「自動車に乗せてやれば、何でもないよ」といつて通りがかりの車を呼び止めた。

自動車の後姿を見て老妓は云つた。

「あの子も、おつな真似をすることを、ちよんぼり覚えたね」

柚木にはだんだん老妓のすることが判らなくなつた。むかしの男たちへの罪滅しのために若いものの世話でもして氣を取直すつもりかと思つていたが、そうでもない。近頃この界限に噂が立ちかけて来た、老妓の若い燕つばめというそんな気配はもちろん、老妓は自分に対して現わさない。

何で一人前の男をこんな放胆な飼ひ方をするのだろう。柚木は近頃工房へは少しも入ら

ず、発明の工夫も断念した形になっている。そして、そのことを老妓はとくに知っている癖に、それに就いては一言も云わないだけに、いよいよパトロンの目的が疑われて来た。縁側に向いている硝子窓ガラスから、工房の中が見えるのを、なるべく眼を外らして、縁側に出て仰向けに寝転ぶ。夏近くなつて庭の古木は青葉を一せいにつけ、池を埋めた渚なぎさの残り石から、いちはずやつつじの花が蛇あぶを呼んでいる。空は凝つて青く澄み、大陸のような雲が少し雨気で色を濁しながらゆるゆる移つて行く。隣の乾物ほしものの陰に桐の花が咲いている。

柚木は過去にいろいろの家に仕事のために出入りして、醤油樽の黴かび臭い戸棚の隅に首を突込んで窮屈な仕事をしたことや、主婦や女中に昼の煮物を分けて貰つて弁当を使つたことや、その頃は嫌だった事が今ではむしろなつかしく想い出される。蒔田の狭い二階で、注文先からの設計の予算表を造つていると、子供が代る代る来て、頸筋が赤く腫れるほど取りついた。小さい口から嘗めかけの飴玉なを取出して、涎よだれの糸をひいたまま自分の口に押し込んだりした。

彼は自分は発明なんて大それたことより、普通の生活が欲しいのではないかと考え始めたりした。ふと、みち子のことが頭に上つた。老妓は高いところから何も知らない顔をして、鷹揚おうえうに見ているが、実は出来ることなら自分をみち子の婿むこにでもして、ゆくゆく老

後の面倒でも見て貰おうとの腹であるのかも知れない。だがまたそうとばかり判断も仕切れない。あの氣嵩きがさな老妓がそんなしみつたれた計画で、ひとに好意をするのでないことも判る。

みち子を考える時、形式だけは十二分に整っていて、中味は実が入らず仕舞いになった娘、柚木はみなし茹ゆで栗の水つぼくぺちやぺちな中身を聯想して苦笑したが、この頃みち子が自分に憎みのようなものや、反感を持ちながら、妙に粘って来る態度が心にとまつた。

彼女のこの頃の来方は氣紛れでなく、一日か二日置き位な定期的なものになった。

みち子は裏口から入って来た。彼女は茶の間の四畳半と工房が座敷の中に仕切つて拵こしらえである十二畳の客座敷との襖ふすまを開けると、その敷居の上に立った。片手を柱に凭もたせ体を少し捻ひねつて嬌態を見せ、片手を拵こしらえた袖の下に入れて、写真を撮るときのようなポーズを作った。俯うつむ向き加減に眼を不機嫌らしく額越しに覗のぞかして

「あたし来てよ」と云った。

縁側に寝ている柚木はただ「うん」と云っただけだった。

みち子はもう一度同じことを云って見たが、同じような返事だったので、本当に腹を立

て

「何て不精^{ぶしよう}たらしい返事なんだろう、もう二度と来てやらないから」と云った。

「仕様のない我^{わがまま}儘娘だな」と云つて、柚木は上体を起上らせつつ、足を胡坐^{あぐら}に組みながら

「ほほう、今日は日本髪か」とじろじろ眺めた。

「知らない」といつて、みち子はくると後向きになって着物の背筋に拗^すねた線を作った。柚木は、華やかな帯の結び目の上はすぐ、突襟のうしろ口になり、頸の附根を真つ白く富士形に覗かせて誇張した媚態^{びたい}を示す物々しさに較べて、帯の下の腰つきから裾は、一本花のように急に削^そげていて味もそつけない少女のままなのを異様に眺めながら、この娘が自分の妻になつて、何事も自分に気を許し、何事も自分に頼りながら、小うるさく世話を焼く間柄になつた場合を想像した。それでは自分の一生も案外小ぢんまりした平凡に規定されて仕舞う寂寞の感じはあつたが、しかし、また何かそうなつて見ての上のことではなれば判らない不明な珍らしい未来の想像が、現在の自分の心情を牽^ひきつけた。

柚木は額を小さく見せるまでたわわに前髪や鬢^{びん}を張り出した中に整い過ぎたほど型通りの美しい娘に化粧したみち子の小さい顔に、もつと自分を夢中にさせる魅力を見出したく

なつた。

「もう一ぺんこっちを向いてご覧よ、とても似合うから」

みち子は右肩を一つ揺つたが、すぐるりと向き直つて、ちよつと手を胸と鬢へやつて搔い繕つた。「うるさいのね、さあ、これでいいの」彼女は柚木が本氣に自分を見入つてゐるのに満足しながら、藥玉の簪の垂れをピラピラさせて云つた。

「ご馳走を持つて来てやつたのよ。当ててご覧なさい」

柚木はこんな小娘に嬲られる甘さが自分に見透かされたのかと、心外に思いながら「當てるの面倒臭い。持つて来たのなら、早く出し給え」と云つた。

みち子は柚木の権柄けんぺいづくにたちまち反抗心を起して「人が親切に持つて来てやつたのを、そんなに威張るのなら、もうやらないわよ」と横向きになつた。

「出せ」と云つて柚木は立上つた。彼は自分でも、自分が今、しかかる素振りに驚きつつ、彼は権威者のように「出せと云つたら、出さないか」と体を嵩張かさばらせて、のそのそとみち子に向つて行つた。

自分の一生を小さい陥かんせいに嵌め込んで仕舞う危険と、何か不明の牽引力の為に、危険と判り切つたものへ好んで身を挺して行く絶体絶命の気持ちとが、生れて始めての極度の

緊張感を彼から抽き出した。自己嫌惡に打負かされまいと思つて、彼の額から脂汗がたらたらと流れた。

みち子はその行動をまだ彼の冗談半分の権柄ずくの続きかと思つて、ふざけて輕蔑するように眺めていたが、だいぶ模様が違うので途中から急に恐ろしくなつた。

彼女はやや茶の間の方へ退りながら

「誰が出すもんか」と小さく呟いていたが、柚木が彼女の眼を火の出るように見詰めながら、徐々に懷中から一つずつ手を出して彼女の肩にかけると、恐怖のあまり「あつ」と二度ほど小さく叫び、彼女の何の修装もない生地顔が感情を露出して、眼鼻や口がばらばらに配置された。「出し給え」「早く出せ」その言葉の意味は空虚で、柚木の腕から太い戦慄が伝つて來た。柚木の大きい咽喉のどぼとけ仏がゆつくり生唾なまつばを飲むのが感じられた。

彼女は眼を裂けるように見開いて「ご免なさい」と泣声になつて云つたが、柚木はまるで感電者のように、顔を痴呆にして、鈍く蒼ざめ、眼をもとのように据えたままただ戦慄だけをいよいよ激しく両手からみち子の体に伝えていた。

みち子はいよいよ何ものかを柚木から読み取つた。普段「男は案外臆病なものだ」と養母の言つた言葉がふと思ひ出された。

立派な一人前の男が、そんなことで臆病と戦っているのかと思うと、彼女は柚木が人のよい大きい家畜のように可愛ゆく思えて来た。

彼女はばらばらになった顔の道具をたちまちまとめて、愛嬌したたるような媚びの笑顔に造り直した。

「ばか、そんなにしないだって、ご馳走あげるわよ」

柚木の額の汗を掌でしゅつと払い捨ててやり

「こつちにあるから、いらつしやいよ。さあね」

ふと鳴って通った庭樹の青嵐を振返ってから、柚木のがつしりした腕を把^とった。

さみだれが煙るように降る夕方、老妓は傘をさして、玄関横の柴折戸^{しおりど}から庭へ入って来た。渋い座敷着を着て、座敷へ上つてから、棲^{つま}を下ろして坐った。

「お座敷の出がけだが、ちよつとあんたに云つとくことがあるので寄つたんだがね」

荻^{たばこい}入れを出して、煙管で煙草盆代りの西洋皿を引寄せて

「この頃、うちのみち子がしよつちゆう来るようだが、なに、それについて、とやかく云うんじやないがね」

若い者同志のことだから、もしやということも彼女は云った。

「そのもしやもだね」

本当に性が合つて、心の底から惚れ合うというのなら、それは自分も大賛成なのである。「けれども、もし、お互いが切れっぱしだけの惚れ合い方で、ただ何かの拍子で出来合うということでもあるなら、そんなことは世間にはいくらもあるし、つまらない。必ずしもみち子を相手取るにも当るまい。私自身も永い一生そんなことばかりで苦労して来た。それなら何度やつても同じことなのだ」

仕事であれ、男女の間柄であれ、湿り気のない没頭した一途な姿を見たいと思う。

私はそういうものを身近に見て、素直に死に度いと思う。

「何も急いだり、焦^{あせ}つたりすることはいらなから、仕事なり恋なり、無駄をせず、一揆^{いっき}で心残りのものを射止めて欲しい」と云った。

柚木は「そんな純粋なことは今どき出来もしなけりや、在るものでもない」と磊落^{らいらく}に笑った。

老妓も笑つて

「いつの時代だって、心懸けなきや滅多にないさ。だから、ゆっくり構えて、まあ、好き

なら麦とろでも食べて、運の籤くじの性質をよく見定めなさいというのさ。幸い体がいいからね。根気も続きそうだな」

車が迎えに来て、老妓は出て行つた。

柚木はその晩ふらふらと旅に出た。

老妓の意志はかなり判つて来た。それは彼女に出来なかつたことを自分にさせようとしているのだ。しかし、彼女が彼女に出来なくて自分にさせようとしていることなどは、彼女として自分とて、またいかに運の籤のよきものを抽ひいた人間とて、現実では出来ない相談のものではあるまいか。現実というものは、切れ端は与えるが、全部はいつも眼の前にちらつかせて次々と人間を釣つて行くものではなからうか。

自分はいつでも、そのことについては諦めることが出来る。しかし彼女は諦めということを知らない。その点彼女に不敏なところがあるようだ。だがある場合には不敏なもの方に強味がある。

たいへんな老女がいたものだ、と柚木は驚いた。何だか甲羅こうらを経て化けかかっているようにも思われた。悲壮な感じにも衝うたれたが、また、自分が無謀なその企てに捲き込まれ

る嫌な気持ちもあった。出来ることなら老女が自分を乗せかけている果しも知らぬエスカレーターから免れて、つんもりした手製の羽根蒲団のような生活の中に潜り込み度いものだと思った。彼はそういう考えを裁くために、東京から汽車で二時間ほどで行ける海岸の旅館へ来た。そこは蒔田の兄が経営している旅館で、蒔田に頼まれて電気装置を見廻りに来てやったことがある。広い海を控え雲の往来の絶え間ない山があった。こういう自然の間に静思して考えを纏めようということなど、彼には今までについてぞなかったことだ。

体のよいためか、ここへ来ると、新鮮な魚はうまく、潮を浴びることは快かった。しきりに哄笑が内部から湧き上つて来た。

第一にそういう無限な憧憬にひかれている老女がそれを意識しないで、刻々のちまちました生活をしているのがおかしかった。それからある種の動物は、ただその周囲の地上に圈^わの筋をひかれただけで、それを越し得ないというそのように、柚木はここへ来ても老妓の雰囲気から脱し得られない自分がおかしかった。その中に籠められているときは重苦しく退屈だが、離れるとなると寂しくなる。それ故に、自然と探し出して貰い度い底心の上に、判り易い旅先を選んで脱走の形式を採っている自分の現状がおかしかった。

みち子との関係もおかしかった。何が何やら判らないで、一度稲妻のように掠^{かす}れ合った。

滞在一週間ほどすると、電気器具店の蒔田が、老妓から頼まれて、金を持って迎えに来た。蒔田は「面白くないこともあるだろう。早く収入の道を講じて独立するんだね」と云った。

柚木は連れられて帰った。しかし、彼はこの後、たびたび出奔癖がついた。

「おつかさんまた柚木さんが逃げ出してよ」

運動服を着た養女のみち子が、蔵の入口に立ってそう云った。自分の感情はそっちのけに、養母が動揺するのを気味よしとする皮肉なところがあつた。「ゆんべもおとといの晩も自分の家へ帰って来ませんか」

新日本音楽の先生の帰つたあと、稽古場にしてある土蔵の中の畳敷の小ぢんまりした部屋になおひとり残つて、復習直しをしていた老妓は、三味線をすぐ下に置くと、内心口惜しさが漲りかけるのを気にも見せず、けろりとした顔を養女に向けた。

「あの男。また、お決まりの癖が出たね」

長煙管で煙草を一ぷく喫つて、左の手で袖口を掴み展き、着ている大島の男縞が似合うか似合わないか検してみる様子をしたのである。

「うつちやつてお置き、そうそうはこつちも甘くなつてはいられないんだから」

そして膝の灰をぼんぼんと叩いて、楽譜をゆっくり仕舞いかけた。いきり立ちでもするかと思つた期待を外された養母の態度にみち子は詰らないという顔をして、ラケットを持つて近所のコートへ出かけて行つた。すぐそのあとで老妓は電気器具屋に電話をかけ、いつも通り蒔田に柚木の探索を依頼した。遠慮のない相手に向つて放つその声には自分が世話をしている青年の手前勝手を詰る^{なじ}激しい鋭さが、発声口から聴話器を握っている自分の手に伝わるまでに響いたが、彼女の心の中は不安な脅えがやや情緒的に^{はつこう}酩酊して寂しさの微^{ほろよい}醺のようなものになつて、精神を活潑にしていた。電話器から離れると彼女は「やつぱり若い者は元気があるね。そうなくちや」呟きながら眼がしらにちよつと袖口を当てた。彼女は柚木が逃げる度に、柚木に尊敬の念を持つて来た。だがまた彼女は、柚木がもし歸つて来なくなつたらと想像すると、毎度のことながら取り返しをつかない気がするのである。

真夏の頃、すでに××女に紹介して俳句を習っている筈の老妓からこの物語の作者に珍らしく、和歌の添削^{てんさく}の詠草が届いた。作者はそのとき偶然老妓が以前、和歌の指導の礼

に作者に拵えて呉れた中庭の池の噴水を眺める縁側で食後の涼を納^いれていた^なので、そこで取次ぎから詠草を受取つて、池の水音を聴き乍^なら、非常な好奇心をもつて久しぶりの老妓の詠草を調べてみた。その中に最近の老妓の心境が窺^うえる一首があるので紹介する。もつとも原作に多少の改削を加えたのは、師弟の作法というより、読む人への意味の疏通をより良くするために外ならない。それは僅に修辭上の箇所にとどまって、内容は原作を傷けないことを保証する。

年々にわが悲しみは深くして

いよよ華やぐいのちなりけり

青空文庫情報

底本：「岡本かの子全集5」ちくま文庫、筑摩書房

1993（平成5）年8月24日第1刷発行

底本の親本：「老妓抄」中央公論社

1939（昭和14）年3月18日

初出：「中央公論」

1938（昭和13）年11月号

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2020年1月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<https://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

老妓抄

岡本かの子

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>